

# 新美南吉の詩集より

Nankichi×Step

南吉の詩は童話に勝るとも劣らず魅力的。  
地元を中心に活躍する現代の若手作家たちと詩をコラボレーションしていきます。



## 日暮

さびしき春の日暮に  
とのもにでて見れば  
風ざうざうと吹きて  
さらにさびしや  
若草も木の芽も  
なにやらん疲れ  
風ざうざうと  
吹きてすぐるなり  
空地につながれたる  
斑牛はまだ幼きか  
ぬれてかぐろき瞳あげ  
入日の方眺むれど  
風ざうざうと  
そのひとみを吹けり  
風はいづちより  
来るかと思れば  
菜の花畑のはるかより  
吹き来るなり  
今はわがすあしを吹き  
ふところにあふき  
うつろなる心にふき  
さらにさらにさびしや

### 宇都宮望

イラストレーター  
<http://nozo-6.jp/>

落ち着いた中でも、物語があるような絵を描くのが好きで、空想を入り混ぜた作品を作成しています。  
主に動植物、少女を中心に作成しています。

### 絵について

内に秘めた悲しみに、再度気づいてしまった自分をどうすれば良いのか。悲しみと迷いの渦の中にある自分をイメージして描きました。

### 新美南吉



にいみなんきち  
(1913-1943)

大正2年7月30日、愛知県知多郡半田町(現・半田市)に生まれる。幼くして母を亡くし、養子に出されるなど寂しい子ども時代を送る。旧制半田中学校卒業後、「赤い鳥」入選を契機に北原白秋や巽聖歌の知遇を得る。昭和18年、結核のため29才で世を去る。

### 解説

安城高等女学校に職を得ていた時期に書かれた詩で、経済的にはいふまでもなく、比較的健康にも恵まれ、表面的には安定した生活を送っていたが、この作品を見ると、南吉はやはり心の奥に止むことのない悲しみを抱いていたのだ、ということが分る。詩は何となくさびしい日暮れに、戸外へ出て

みると、風が「ざうざうと」吹いて、寂しさがいっそう増してくる、というように書き出される。季節は春なのに若木の木の芽も疲れ果て、ただ非情な風のみが「ざうざうと」吹いている。この作品は「冬」「鯉」といった詩とともに、南吉の死への恐れを感じさせる作品になっている、といっていだらう。

### 解説者

前新美南吉記念館館長

矢口 栄 さん

半田市、知多市、東浦町の小中学校勤務を経て'04年から'11年まで新美南吉記念館館長を勤める。著書「南吉の詩が語る世界」(一粒社出版部)「子どもたちに贈りたい詩」(教育出版センター)「新しい詩の創作指導」(共著・明治図書)ほか。